”平成の大修復“から わかったこと

八代市教育委員会が中心になり平成元年度から行列の復元に取り組んだ「ふるさと創生事業」※。平成4年度には「笠鉾等基本調査」、その後、笠鉾の修理や復元を行いました。当時の調査、修復について今あらためて紐解くと、妙見祭が受け継がれてきた時代背景や驚くべきまちの力がわかり、妙見祭がますます楽しくなりますよ！

※平成元年、八代市は「ふるさと創生一億円（竹下内閣時）の活用方法について協議を重ね、八代神社祭礼（妙見祭）、神幸行列の復元、笠鉾の修理、後継者育成などを行うこととなりました。

❖祭りは男衆だけのものではなかった！ ～祖母から母、娘へ…針仕事が支えてきた水引幕～

妙見祭がもっと面白くなる！その❶

「笠鉾修復に携わり、博物館で水引幕を全部を見て最も印象に残っているのは、**そのままの状態を残していた**ということ。八代は町内で修復し、プロの手に委ねていない。それが良かったのです。もしその時プロに任せていたら全然違うものになっていたのではないでしょうか。どの水引幕もお母さんやおばあちゃんたちが一生懸命縫ったものばかり。自分達のできる範囲で自分達の縫い方で破れやほつれを直し続けています。当時の人々はそれだけの財力がなかったのか、もしくは、それだけお金を掛けるほどの祭りだと思っていなかったとも考えられます。**妙見祭は、女性たちが脈々と支え続けた祭りだった**のです」。

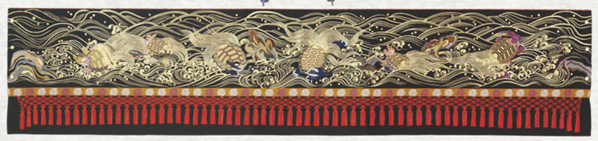
卯川治男さん

植物染織工芸研究家。京都太秦での時代劇衣装考証、『開運！なんでも鑑定団』レギュラー出演。妙見祭の修復では絵解きをはじめ染織品の修復に尽力。現在も妙見祭の着物について毎年指導している。

❖これが感動の“千人針”！ 修復に関わった人達の胸を打った【蘇鉄】の水引幕

お母さん、おばあちゃん達が自分の家にある糸を使い、破れやほつれを直し続けてきた跡が如実にわかる蘇鉄の水引幕（裏側）。裏地にまで突き通り縫い付けられた絹・綿・毛糸等種類も太さも違う十種を上回る赤糸でしっかりと縫い留められ、まるで裏側は「千人針」状態！ 明治32年生まれのこの幕が120年以上を生き続けた生命力は、二之町のお母さん達による何世代にも渡る「針仕事」が支えてきました（現在は博物館に保存、祭礼では2019年に新調された水引幕を使用）。

千人針状態の蘇鉄水引幕の裏側

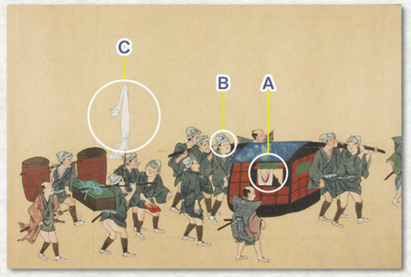


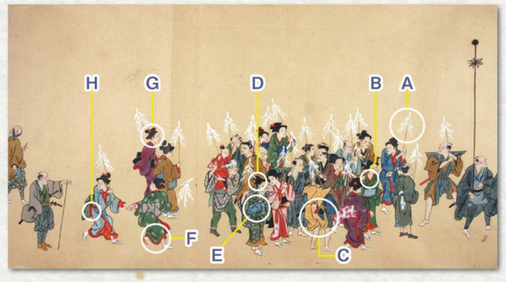
笠鉾蘇鉄の水引幕。天下泰平を祝うめでた尽くしの飾りでいっぱい

―行列に復活した【白和幣】と【籠】の絵解きをウォッチング！―

妙見祭がもっと面白くなる！その❷

❖絵巻をもとに神幸行列を再現すべし！ ～絵解きでわかる驚きの事実～





A 白い和紙の御幣（神様への捧げ物）
B 赤い襟は絹を赤く染めたもの。この時代の流行りかも？
C 歩きやすく、裾がまとわりつかないようにした独特の袴姿
D 地味めに高さをおさえた髪型「つぶし島田」
E 前結びの帯姿も普通だった（決して遊女ではない）
F 裾に綿を入れて膨らみをもたせた「フキ」
G 髪型は「島田」。花嫁の「文紋高島田」よりも低い
H 「だらり結び」

《白和幣》

名前の由来は古事記に遡ります。読みは「シラニギテ」。神に供える麻の布のこと。絵巻の人物は宮地に住む人々です。宮地は妙見宮のお膝元であり、地元の祭りに晴れ着を着て祭りに参加していたことが分かります。

《籠》

絵巻物では、妙見宮や神宮寺の社僧が籠に乗っている様子が描かれています。籠に乗るのは一番位の高い僧侶です。明治維新後、神宮寺は廃止されたのでそれ以降は神官と斎主は乗馬で行列し、寺院の僧侶は見られません。現在、籠に乗るのは小さな子どもとなっています。

❖執念の修復…ここまでやった！ ～水引幕に描かれた蝶を解明～

全20種33頭

水引幕に描かれた33頭の蝶の種類、雌雄、裏表、生息地域を詳細に調査。断定はできないとしながらも、当時の蝶の生態まで調べあげ、八代で描くことのできた蝶の種類と特定してあります。

1. ウラギンヒョウモン
2. ナガサキアゲハ
3. ウラギンヒョウモン
4. ナガサキアゲハ
5. ナガサキアゲハ
6. アゲハチョウ
7. アゲハチョウ
8. アオスジアゲハ
9. アゲハチョウ
10. スジクロシロチョウ
11. キチョウ
12. アオスジアゲハ
13. ナガサキアゲハ
14. ツマグロヒョウモン
15. ツマグロヒョウモン
16. アカタテハ
17. ウラギンヒョウモン
18. ナガサキアゲハ
19. アゲハチョウ
20. キマダラヒカゲ
21. キチョウ
22. スジクロシロチョウ
23. アオスジアゲハ
24. アオスジアゲハ
25. ナガサキアゲハ
26. ナガサキアゲハ
27. アゲハチョウ
28. アゲハチョウ
29. ツマグロヒョウモン
30. ツマグロヒョウモン
31. アオスジアゲハ
32. アオスジアゲハ
33. ナガサキアゲハ

―蝶マニア必見！【本蝶蕪】の修復―

妙見祭がもっと面白くなる！その❸

❖後世に残すべき昭和の逸品！ ～白地海原群飛蝶模様綴水引幕～

旧

現

白地海原群飛蝶模様綴幕について、『妙見祭笠鉾の修復』という資料に、「妙見宮御祭礼神幸行列の後世に残すべき昭和の逸品である」と書かれています。しかも綴織を使っていたのは本町だけだったとか。さすが、豪商の町ですね！

平成元年時点の水引幕は、「白地海原群飛蝶模様綴水引幕」（写真上）。切れや欠損も多く見られたので保存することとし、幕を新調することになったそう。

綴幕を修復するには莫大な費用がかかり、製作も技術的に困難であることから、絵巻にも残されていたとされるその一代前に使用されていた、「黒天鵞絨本金糸波ニ蝶縫水引幕」（写真下）を復元することになりました。

妙見祭がもっと面白くなる！その❺

笠鉾蜜柑には6体の猿がいて様々なポーズをとっていますが、そのうちの1体は志村けんの「アイーン!」のようなポーズをしています。ぜひ探してみてくださいね◎

妙見祭がもっと面白くなる！その❹

中島町の笠鉾「蜜柑」には、蜜柑以外にも白い象に鍬を持つ子供が乗る飾り、「象に唐子」があります。大正11年製作のもので、平成12年に中島町で見つかりました。しかし、「象に唐子」を飾って出た年に嵐となったためジンクスになり、それ以降飾らなくなったのだとか。

妙見祭、「DENDEN PRESS」 ◎写真提供／八代市、妙見宮祭礼絵巻（八代神社所蔵）

妙見祭がもっと面白くなる！その❻

❖妙見祭の花形【獅子組】に注目!!

飯田哲さん

獅子組楽長。本蝶蕪を経て25歳頃より獅子組に。今年で獅子組歴50年。妙見祭保存会行列保存部会長。エフエムやつしろ「かっぱのoh！ちゃちゃ」月曜日担当コメンテーター。

獅子組が守り続ける厳格なしきたり、時と場所によって変わる3種類の舞方など、運動量・技術ともに見物客にとって大変見ごたえのあるのが獅子の演舞。獅子組楽長を長年務める、飯田哲さんにお話を聞きました。

まずは知っておこう！ 獅子舞の始まり

獅子舞の創始者・井櫻屋勘七（八代城下の商人）が、「長崎くんち」の羅漢獅子に感銘を受け、妙見祭への奉納を思い立ち、初めて妙見祭へ奉納したのが元禄4年（1691）とされています。長崎で見た中国やオランダの風俗を取り入れ、八代オリジナルの獅子舞を勘七が創作したのです。

これは貴重！門外不出の「獅子楽之由来」

現在、博物館に所蔵されている『獅子楽之由来』には、獅子舞の由来や獅子をあやす玉振りの舞方、チャルメラの楽譜などが記されています。それには「決而他見無用タルベク事也」とあり、獅子組の間でも門外不出とされています。特にチャルメラの楽譜はほとんどの人は目にしたことがなく、現在でも口伝で教えられているそう。

獅子組は大忙し！

《本祭までの主なスケジュール》

- ▶幹部打合せ
- ▶顔見せ［10月15日］…新入りの紹介
- ▶注連卸［11月1日］…妙見宮に納めた獅子頭等を出して獅子舞の奉納
- ▶ならし［11月7日］…この日より13日まで夜に各所で獅子舞を舞う
- ▶飾り付け［11月］…中島町の2軒の家に獅子を飾る ※14日以前いちばん近い日曜日
- ▶役割［11月14日］…15日の役割（誰がどこで獅子に入るか等）を決める
- ▶浅井神社例祭［11月15日］
- ▶松井家への獅子舞奉納［11月15日］…ここでしか舞わない【平長庭】を舞う
- ▶全体練習［11月19日～21日］
- ▶役割［11月22日］…23日の役割を決める
- ▶本祭［11月23日］…夜8時の徳淵津での演舞まで

《チャルメラ》

- ●紫檀・真鍮製
- ●長さ：46.0㎝

昔は麦の穂がリードでした。現在はオーボエと同様、リードを2枚重ねて吹きます。

《獅子組の組織図》

獅子組の行列は、祭当日は総勢100名を超える大所帯となります。約25名が交代で獅子の中に入っているそう。規律を重んじ、しきたり通りの動きを継承し続ける獅子組には、他にもたくさんの約束事があります。

獅子組には“帳面持”という役割がある

帳面とは、獅子組での役割について詳細に書かれた当日の出番確認書のようなもの。出番も多く、しかも大所帯である獅子組にとって、いつ、どこで、誰が何の役となるのか、といった当番表が必要です。そこで、獅子舞が始まる前に帳面に書かれた人物が間違いなくその場にいるかなどを毎回確認するのです。「祭りが終わった後は重くなっているような気がします」と飯田さん。こうして記録を残すことで、後世に繋がっていきます。

結び紐につけられたお札のようなものは、全ての出番を持つ担当者の名前が1枚1枚結ばれていて、当日名前確認の際に渡されます。役についた人にとって記念の札に。隅の判子は飯田さん手作りの消しゴム判子！

飯田さんのおしゃれコーナー

飯田さんは今でこそ幹部なので、そのいでたちは羽織と裁着（たっつけ）ですが、獅子の中に股引として入っていた頃は、衣装の下に長襦袢を着用していたそう。この長襦袢は女性物で正絹。獅子組には絹織物などの装いの華美を競い合ったり、昼を過ぎたら肩脱ぎや着物の中と外とを入れ替えたりする習慣があり、飯田さんは龍の描かれた右肩が見えるよう肩脱ぎをしていました。

当時、町人は絹の着物を着ることはご法度でしたが、妙見祭では獅子組として特別に許されていた名残と言われています。**“かぶきもの”や“はぐれ雲”的な「粋な演出」**なのだとか！「最近は大人しい傾向にあるが、以前はまるでファッションショーのようでした」。

飯田さんが25年愛用している煙草入れ。紐の留石がなんと獅子のデザイン！

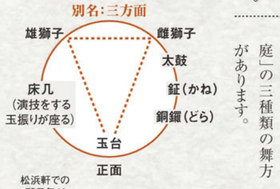
《獅子の舞方》

「本庭」「平長庭」「平庭」の三種類の舞方があります。

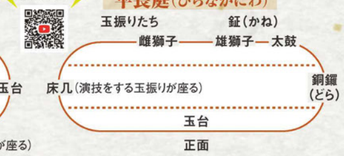
◆本庭
神社の境内で祭礼日に初めて神前で舞うもの。

◆平長庭
松浜軒での舞われる舞方で、一方向だけが正面となる形式。松浜軒の庭の形に合わせて、奥行きが浅く横に長い、池を間に挟んだ御殿の方にだけ正面を向けた舞方。

◆平庭
細長く2方面を正面とする舞方で、神前での奉納の舞が終わり、「お次」と呼ばれる妙見宮横の四つ辻で舞われます。これは、以前は神社の境内前では桟敷席が設けられ、そこで殿様のご名代などに獅子舞をご覧に入れた名残であると言われています。



松浜軒での獅子舞が視聴できます



妙見祭がもっと面白くなる！その❼

❖独自の視点で読み解く！「妙見祭研究室」へようこそ

獅子組楽長の飯田哲さんと、妙見祭研究家の原田聡明さんに、お二人の“オモシロ自説”について教えてもらいました。

原田教室

◉笠鉾と亀蛇に守られた城下町 方角を90度右回転すると“四神相応”に！

四 神
《各方位の守護神》
北➡「玄武」
東➡「青龍」
南➡「朱雀」
西➡「白虎」

神応とは**四相**

古来中国から伝わった風水の「種」。東西南北にはそれぞれ方角を守る四神がいて、それらを祀れば厄災を避け、幸運を得ることができるというもの。

原田聡明さん

八代市で文化行政に携わり、熊本大学、崇城大学で21年間講師を務める。日本民俗建築学会元理事・評議員。文化財修理技術者。八代妙見祭保存振興会相談役。

東に川、西に大道。南に海・湖、北に山という地勢が四神に最もふさわしく、平安京はまさに四神相応の地と言われています。そこで、八代城下町を見てみると、**東に山（龍峰山・上宮山）、西に海・湖（八代海）、南に川（球磨川）、北に大道（薩摩街道）**という地勢。この方角を右回りに90度回転させると…四神相応の地に！ 東を北と見なせば、玄武＝亀蛇となり完全に四神相応と符合する、という原田さんの大発見は、八代市民にとってワクワクする説ですね！

飯田教室

❶各国で獅子の読み方に共通点がある!?

《「獅子」の読み方》
日本➡「シシ」
沖縄➡「シーサー」
中国➡「シーズー」
中央アジア➡「シ」
インド➡「シーハー」
アフリカ➡「シンバ」

どの読みにも“シ”が含まれるという共通点が！ 獅子は空想の神獣。シーサーは中国福建省から入って来たと言われているだけに、読みが近いですね。

❷玉振りの足跡（軌跡）が“五芒星”!?

「あれ？ これは星になっている！」と飯田さんも気づいた時にはビックリしたそう。今年の妙見祭では玉振りさんの動きをしっかり見てみよう！

❸獅子の行進は“七・五・三”のリズムで進んでいる！

日本の吉数である「7・5・3」をきちんと踏んでいるのです。妙見祭で獅子組を見たらカウントしてみて◎

◎取材協力（敬称略）／珈琲店ミック ◎監修／原田聡明 ◎参考資料／『大妙見祭展～葉ひらく祭礼風流』、『八代市文化財調査報告書第九集 妙見祭笠鉾 八代神社祭礼神幸行列笠鉾等基本調査報告書』、『八代市文化財調査報告書第十七集 妙見祭笠鉾の修復 八代神社祭礼神幸行列笠鉾等修復記録報告書』、『八代市文化財調査報告書第43集八代